

ハリー・ハンフリー・ムーアの日本イメージ

早稲田大学 瀧井 直子

アメリカ人画家ハリー・ハンフリー・ムーア(1844-1926)は、生前はオリエンタリズム絵画や日本を描いた作品でよく知られていた。彼は3歳で聴覚を失うが、ペンシルベニア・アカデミー・オブ・ファイン・アーツなどで学んだ後、ミュンヘン滞在を経て、1866年にジェロームのアトリエに入門。翌年には同門下のアメリカ人としては初めてエコール・デ・ボ・ザールに入学した。1869年末頃スペインに渡りグラナダでフォルトゥーニと親交を深め、アルハンブラ宮殿などを描く。さらに2年半ほどをモロッコで過ごし、同地に取材した作品を制作した。美術評論家サダキチ・ハルトマンは、ムーアを「最も成功したアメリカ人オリエンタリストのひとり」と評価した。

没後久しく顧みられなくなったムーアに関する資料としては、生前の批評や1949年の回顧展の小冊子のほか、研究者による若干の記述があるに過ぎなかった。しかし、2007年にはエリザベス・ブーンやキンバリー・オルカットが論考を発表し、その存在は俄に注目を集めつつある。

本発表では、ムーアの絵画作品の中で、これまでほとんど論究の対象となっていなかった日本を主題とした作品に焦点をあてる。画家の来日の時期を巡っては諸説あったが、今回の調査で1881年に半年ほど滞在していたことが判明した。しかしながら、他の多くのムーア作品同様、日本作品の大半は所在不明である。そこで、今回はこれまで知られている資料に加え、この度明らかになった作家存命中のアメリカの雑誌などに掲載された図版や記述に基づき、作品を概観する。その上で、ムーアの日本作品の特質と背景について考察を加え、最後にその意義について言及する。

ムーアの日本関連の作品には日本滞在時と、後年パリのアトリエで描かれたものがある。前者は「日本コレクション」と呼ばれた約60点の油彩画の小品からなる。後者には《吉原歓楽街一瞥》(1887)や《日本の音楽家》を挙げることができる。それは日本時代の習作や、時に日本人モデルを用いて描かれ、パリで人気を博したと伝えられる。また、挿絵となった作品もある。ピエール・ロチの英語版「日本の婦人たち」(1890『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』)には、図版8点が掲載されている。興味深いことに翌年の『フィガロ・イリュストレ』に掲載された同記事のフランス語版には、船岡末利が指摘したように留学中の黒田清輝が挿絵を寄せている。

ムーアのイメージは黒田の挿絵や、日本女性像を数多く描いたセオドア・ウォレスの絵画とも一線を画する特徴を示している。ムーアのエキゾチックで官能的な日本女性像は、フランス・アカデミズムの伝統である理想化された人体表現を踏襲したものであり、ジェロームの影響を指摘された代表作《アールメ、アルハンブラの夢》(1876 焼失)の延長線上にある。ムーアの日本作品は、東方趣味と日本趣味の関連を考える上で重要な例証とみなしうる作例であることを指摘する。